

日蓮大聖人御書全集

なんぶのろくろうどのごしよ

南部六郎殿御書

新版
1806
〜
1807

なんぶのろくろうどんのごしよ

南部六郎殿御書

ぶんえい ねん がつ にち さい はきいさねなが

文永 8 年 ('71) 5 月 16 日 50 歳 波木井実長

ねむ しし て つか なが 棹 た

眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさおを立て

なみた ほうぼう かしやく るなん

ざれば浪立たず、謗法を呵責せざれば留難なし。

ぜんびく ほう やぶ もの み お かしやく

「もし善比丘あつて、法を壊る者を見て、置いて、呵責せ

お じ 恐 いま よ のち ご 覧

ずんば」の「置」の字をおそれずんば、今は吉し、後を御らん

むけんじごくうたが ゆえ なんがくだいし しあんらくぎよう い

ぜよ、無間地獄疑いなし。故に、南岳大師、四安楽行に云

ぼさつ あ あくにん しょうご じばつ あた

わく「もし菩薩有つて、悪人を将護して治罰すること能わ

あく じよう ぜんにん しょうほう はいえ

ず、それをして悪を長ぜしめ、善人を悩乱し、正法を敗壞

せば、この人は実には菩薩にあらず。外には詐侮を現じ、常

ことば な

われ にんにく ぎよう

ひと みようじゆう

にこの言を作さん。『我は忍辱を行ず』と。その人は命終

もろもろ あくにん

じごく お

うんぬん

して、諸の悪人とともに地獄に堕ちん」云々。

じゆうりんぎよう

い

ひぼう

まさ

ぐうじゆう

十輪經に云わく「もし誹謗せば、応に共住すべからず、

しんこん

しんこん

ぐうじゆう

すなわ

あびじこく

また親近せざれ。もし親近し共住せば、即ち阿鼻地獄に

おもむ

うんぬん

せんだん

はやし

い

手折

趣かん」云々。梅檀の林に入りぬれば、たおらざるにそ

み くん

ひぼう

もの

しんこん

しゅ

ぜんこん

の身に薰ず。誹謗の者に親近すれば、修するところの善根こ

めつ

じごく

だらく

ゆえ

ぐけつ

し

とごとく滅して、ともに地獄に墮落せん。故に、弘決の四に

い

ひと

もとあくな

あくにん

しんこん

のちかなら

あくにん

云わく「もし人、本惡無きも、惡人に親近せば、後必ず惡人

な あくみようとんか あまね
と成り、悪名天下に遍からん」。

ほうぼう ないげ こっか ふた
およそ謗法に内外あり。国家の二つこれなり。外とは、

にほんろくじゅうろくかこく ほうぼう ない おうじようこのえ そし

日本六十六箇国の謗法これなり。内とは、王城九重の謗り

ないげ きんせい そうびよう しゃしよく かみ す

これなり。この内外を禁制せざれば、宗廟・社禊の神に捨

かなら こっかほろ い そうびよう

てられて、必ず国家亡ぶべし。いかにと云うに、宗廟と

こくおう たましい あが しゃ ち かみ しよく ごこく

は国王の神を崇む。社とは地の神なり。禊とは五穀の

そうみよう ごこく かみ りようじん ほうみ う くに す たも

総名、五穀の神なり。この両神、法味に飢えて国を捨て給

ゆえ こくどすで ひびすいげん ゆえ ぐけつ い ち

うが故に、国土既に日々衰減せり。故に、弘決に云わく「地

ひろ けい っ ふう しゃ しよく

広くして敬を尽くすべからず。封じて社となす。禊とは、

い　　ごごく　　そうみよう　　すなわ　　ごごく　　かみ　　ゆえ　　てんし
謂わく五穀の総名にして、即ち五穀の神なり。故に、天子
こ　　ところ　　そうびよう　　ひだり　　しゃしよく　　みぎ　　しじ
の居する所には宗廟を左にし、社稷を右にし、四時・
ごぎよう　　し　　つら　　ゆえ　　くに　　ほろ　　しゃしよく　　うしな
五行を布き列ぬ。故に、国の亡ぶるをもつて社稷を失う
ゆえ　　さんげだいし　　くに　　ほうぼう　　こえあ　　ばんみん
となす」。故に、山家大師は「国に謗法の声有るによつて万民
かず　　げん　　いえ　　さんきよう　　つと　　しちなんかなら　　たいさん
数を減じ、家に讃教の勤めあれば七難必ず退散せん」と。
ゆえ　　ぶんぶん　　ないげあ

ごがつじゅうろくにち

五月十六日

にちれん

かおう

日蓮

花押

なんぶのろくろうどの

南部六郎殿